

ジュニア育成の現状——沖縄編 (小山正樹・沖縄県高体連専門部委員長に聞く)

「ボウリング メジャー化への一歩は 高体連加盟、インターハイ種目へ…」



小山 正樹(こやま・まさき) / 1972年6月12日生まれ、沖縄県南城市出身。琉球大学大学院修了後、97年より教職。現在県立陽明高等支援学校勤務。2007年より県高体連ボウリング専門部副委員長、13年より委員長。15年より県ボウリング連盟常任理事。日本スポーツ協会ボウリング公認コーチLv3、JBC/USBCブロンズコーチ、JBC第1種公認審判員。

15年前、県高等学校体育連盟への加盟を果たしたのを契機に、小学生から大学生まで、一貫した育成の取り組みを進める沖縄。その成果は、今年全日本中学選手権で男女アベック優勝、全日本高校選手権でも女子で優勝など、着実に実を結びつつある。沖縄県立陽明高等支援学校勤務の傍ら、沖縄県高体連ボウリング専門部委員長として中心的な役割を担っている小山正樹さんに、ジュニア育成の現状、そして今後の夢などをお聞きした。

2007年に全国で6番目に 高体連加盟を果たす

——小山先生がボウリングとかわかるようになったきっかけは、何だったのですか。

学生時代はサッカーをやっていました。教員になって25年になりますが、ボウリングは教員になってから趣味でやっていたんです。その趣味が高じて、沖縄県の高体連にボウリングを加盟させようというときに、頼まれてお手伝いをさせていただいたのがきっかけでした。それが2007年ですから、高体連の専門部をスタートして15年になります。最初は副委員長、7年目からは委員長を引き継いで9年目になります。

——高体連加盟のための条件はどういうものでしたか。

都道府県によって違いがあって、部活動をやっている高校が1校、2校でもあれば専門部をスタートできるところもありますが、沖縄は4校以上あることが条件でした。さらに私のように教職員でボウリングをしていて、ボウリングの知識があり、大会運営や記録の管理などをやれる人がいないといけない。

——高体連に加盟することのメリットはどういうものですか。

まず選手のメリットが大きい。大会に参加する場合学校からの派遣になるので、出発や帰省が平日にかかった場合でも出席扱いになるし、何より大きいのが、補助が出て、費用の負担が格段に軽くなることです。これがなければ、県連から多少の補助があっても、ほぼ自己負担になりますからね。また学校が安全保険、スポーツ保険に必ず入っているので、大会期間中の事故やけがに対して保証されます。さらに選手が進学や就職をする際に、活動実績がプラスに働くこともあると思います。

——高体連に加盟している都道府県はいくつあるのですか。

最初に石川県が加盟して、以

後青森、三重、京都、神奈川、岡山、大分、そして沖縄と、現在8府県が入っています。沖縄県は全国で6番目の加盟でした。

——まだ8府県にとどまっているということは、何が加盟の障壁になっているのでしょうか。

都道府県によって加盟の条件は違いますが、いちばんはボウリングに理解のある教職員を見つけることですね。要項を作り、大会を運営し、成績を管理して…と、それらをボランティアでやってもらうわけですが、最近は働き方改革とかで、余計に難しくなっています。もしそういう先生がいても、継続してやってもらうためには、連盟とセンターさんとで役割分担しながら、負担を軽減する必要があります。

——沖縄も緊急事態宣言下では、活動に影響がありましたか。

部活動をしている高校は11校ありますが、高体連からは部活動の中止要請が出て、全国大会に向けた強化練習だけ、感染対策を講じた上で許可されていました。

小学生から大学生まで 一貫した指導体制の構築

——小山先生が関わられているのは高校生だけですか。

私は沖縄県連の理事でもありますので、強化事業として8年前から、トレーニングセンター、つまり“トレセン”という



▲強化事業の中心となっているトレセンの練習風景 (写真提供・沖縄県高体連ボウリング専門部) ▼外部講師を招いての講習も

ワードで県内の各センターを転々としながら、小学生から大学生までを一堂に集めて、スポーツコンディションを作って練習をさせるなど、切磋琢磨させています。これを沖縄県の場合協会さん、スポーツ協会さん、ボウリング連盟、そして高体連専門部の4団体が協力してやっています。

——その試みの効果は感じられていますか。

大学生、高校生が小学生を教えたりということもありますし、一緒に投げることでチーム沖縄の意識が芽生え、いい効果が生まれています。今年の中学選手権は男女とも優勝、高校選手権の女子でも優勝しましたが、小学生のときから見て、一貫した指導体制の成果だと思っています。

——ジュニアの層は厚くなっていますか。

一時は県の高校総体で140

名の参加がありました。小、中、高生を対象にした秋の県大会は、200名を超えています。ただ、コロナの問題を別にしても、少子化や、とくに女子はストリートダンスが流行っていて、そちらに人が流れたりしていることもあって、最近は勧誘に苦戦しています。また小学生の勧誘には、親子ボウリングというような、保護者を巻き込むことがカギになると思います。

——学連が弱体化してきて、一貫性という点では高校で流れが切れている感があります。

九州は学連加盟が1校もなくなくなっていました。高校入学時から育成していた女子選手が4年前に沖縄国際大学に進学するというので、教授に掛け合うなど私も協力して、一緒になって部を立ち上げ、学連に加盟しました。それからは、毎年多数の進学者があり、昨年の全日本大学選手権では、女子が優勝、男子は準優勝をしています。県内でさらに2、3の大学が加盟すれば、サーキットリーグもできるねという話をしています。

——小山先生が目指しているところはどこですか。

私は国体の監督もしているんですが、やはり小学生から社会人まで、できれば県内でつながって行って、地元で貢献できる選手を育成する、と



いうビジョンを持って頑張っています。それがちょうど実を結びつつあるのが今なんです。その要因として、県高体連があるおかげで、保護者を巻き込みながらジュニア育成をできているかなと思います。

——高体連加盟の都道府県が増えていくことも必要ですね。

ボウリングがオリンピックの種目になることが、業界の夢ですが、それ以前に国内ではインターハイの種目にならないと、メジャーになっていかないのかなと思います。現在加盟している8府県が持ち回りで春高ボウリングというのを毎年開催していますが、選手たちには好評で、ひとつのモチベーションになっています。

——インターハイ種目になるには、どういう条件をクリアすればいいのですか。

24都道府県に高体連専門部ができれば、条件をクリアできます。私はJBCの高体連加盟推進委員会の特別委員もやらせてもらっていますが、そこで意見交換をしながら、いろいろ進めているところです。



▲2018年には沖縄・サラダボウルで春高ボウリングを開催